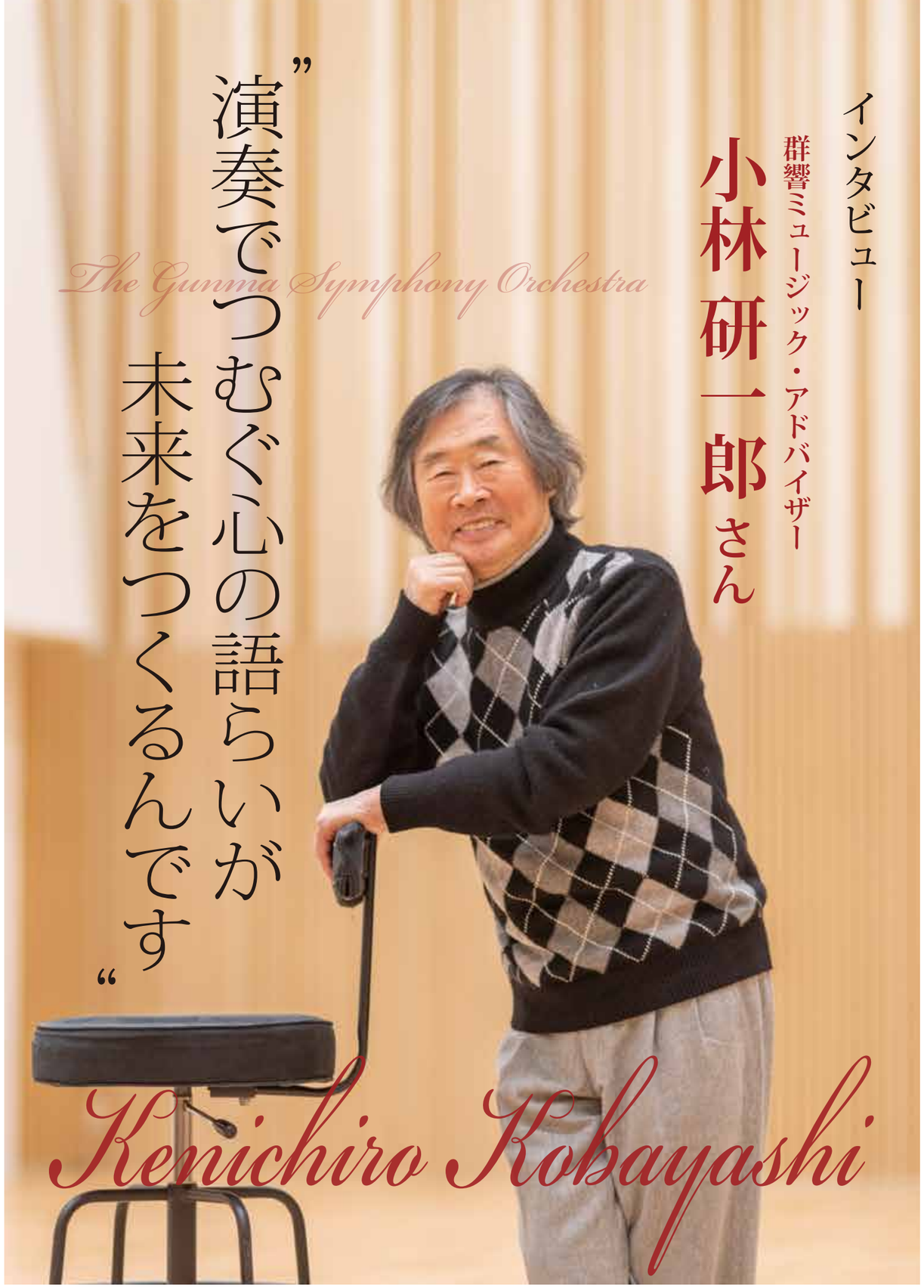

インタビュー
群響ミュージック・アドバイザー 小林研一郎さん

“演奏でつむぐ心の語らいが未来をつくるんです”

「炎のコバケン」の愛称で知られる世界的指揮者・小林研一郎さんが、2019年4月に群馬交響楽団（群響）のミュージックアドバイザーに就任しました。群響の新しい本拠地・高崎芸術劇場での演奏、音楽と子どもたち、これからの群響について話を聞きました。

まだまだ進化の途上 高崎芸術劇場×群響

「高崎芸術劇場は非常に良いホールですよ。でも、もっと素晴らしい音が響くはずです」。芸術劇場で初めて指揮を執った小林さんはこう振り返ります。クラシック専用ではなく、多目的ホールの大劇場。ここで、どうしたら聴衆の心を打つ演奏ができるのか、それを群響と小林さんとで日々、追及しているのです。

「オーケストラは、天才の集まりです。天才の演奏は、ホールを凌駕します。できないのは、指揮者の責任」と言い切る小林さん。「9月の公演では聴衆からたくさんの拍手をいただきましたが、満足はしていません。観客全員が総立ちになる演奏が私の究極の狙いであり、願いです」。穏やかな笑みを浮かべながら、力強い口調で語ります。

ひたむきな演奏は子どもたちに必ず届く

群響の活動の一つに群馬県内の小中学生を対象として、オーケストラに親しんでもらうために開かれる「移動音楽教室」があります。小林さんはそこで、演奏だけでなく、音楽にまつわる色々なことをざっくばらんに語り合いたいという思いを抱いています。

例えば、小林さんが幼少のころにベートーベンの第九を聞いて涙を流したこと、苦しいとき人は音楽から力をもらえるんだということ。「実は個人的に“移動音楽教室”という名称はあまり気に入っていないんですよ。観客が子どもたちでも、きちんと“演奏会”と呼ぶべきだと思っています」と話す小林さん。「子ども扱いしないで、ひたむきに演奏する。そうすれば、子どもたちは必ず耳を傾けてくれます。その中から、音楽を愛する人が生まれてくれると、うれしいですね」。

市民の応援で群響を国内最高峰の水準に

「日本のオーケストラは東京や大阪など大都市に集中しています。そんな中、地方都市である高崎にとって群響の存在は本当に貴重です」。市民が公演に足を運び、地元企業からの応援が加われば、群響は輝きを一層増し、東京のオーケストラと肩を並べることができると小林さんは語ります。また、群響の活動だけに留まらず、市民が音楽に触れる機会をもっと増やせないかと小林さんは考えを巡らせています。

「高崎市の音楽監督という役割があれば受けたいですね」。小林さんの音楽に対する情熱が、音楽のある街・高崎を進化させてくれる――そんな期待に夢は膨らみます。

※取材日／2020年2月1日
組織名・肩書は当時のものです。

小林 研一郎／こばやし けんいちろう

1940年福島県いわき市生まれ。東京藝術大学音楽学部作曲科・指揮科の両科を卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞受賞。
ハンガリー国立フィル、チェコ・フィルなど数々の海外オーケストラの日本公演や、日本フィルなどの海外公演を成功へと導く。2013年に旭日中綬章、ハンガリーでは大十字功労章（同国最高位の勲章）、ハンガリー文化大使など数々の勲章や称号が授与されている。
現在、群響ミュージック・アドバイザー、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル桂冠指揮者、読売日響特別客演指揮者や東京文化会館音楽監督などを務める。